

年7月の夏休みが来たからである。そして敗戦の予感のあった私は、最後の授業のあと、彼女たち10名とホテル・デス・インデスでしばしのお別れのパーティをやった。何もしらぬ彼女たちは9月にはまた村落調査のレポートを提出する約束をしてくれたのだが――。

広島に原子爆弾が落されたのはその後間もなくであった。私はこうして最初の女子学生たちと別れた。しかしクラスのリーダーだったあのしっかりした学生――その名をスパルティマという――今はインドネシア厚生省の婦人局長として活躍している。私は今も教壇に立つたびに私の最初の女子学生、あのインドネシアの若い女性たちの姿がほうふつとして心に浮んでくるのである。

## 日本の近くの土地

保 柳 睦 葵

このあいだ(6月上旬)、長野県の松代へ行って、例の地震の情勢を見聞してきました。弘化4年の善光寺地震では、私の本籍がある町は全滅し、私の2代前の人々もみんな死亡したという前歴がある地帯だから、そういう大地震にならなければよいかと心配してです。地震観測所でいろいろな資料を見せてもらったり、話を聞いても、結局は原因がつかめない。だから将来の予想もできない、というのが結論です。これが現代の学問の限度ですが、現代の地震学がこんな程度であることが世間の人々にわかってきたことは、よいことだと思います。学問の限度を越して、勝手な評論をする学者が多い世の中だからです。一つわかったおもしろいことは、100年以上も経った古い家の方が強く、新式のきれいな家の方にかえてあぶない例が少なくないことです。善光寺地震にも耐えた家へ行って調べてみたら、お隣りのモダンな家の方がずっと危険なことがわかりました。これでは何が技術の進歩かわかりませんが、中米や南米で、マーヤやインカの建造物はビクともしていないのに、近代のものが地震で破壊されているのと同じ例は、身近かな日本にもありそうなことです。学問も、見かけは現代的で派手だが、いざとなったら吹き飛んでしまうような土台のない観念論ではいけないと思います。

土台といえば日本の地理学の発達に対しても、近くに地理的研究が空白な土地が残されていることは許されません。ところが現実には、朝鮮半島、中国本土、台湾の地理を研究している人が何人いることでしょうか。安易な評論や観念論をやる人はいるようですが、地味な具体的研究はどうでしょうか。現代の中国では、学者は観念論などはやっておらずに、みんな真剣に専門の分野で具体的研究と取り組んでいます。これは中国の学術雑誌をみれば明らかです。地理学では、自然環境およびこれを構成する諸要素についての研究は大変なものです。これも認識しないで日本では、学問の限度もわきまえないジャーナリスティックな観念論で済ませていることは許されません。

そこで私が現在、一番力を入れてやっている仕事は、最近の中国本土や台湾で行われている地理学研究成果を、日本の学界に知らせようとのことです。なかなか優れた研究成果をあげている方面もありますし、客観的材料が不足なのに、結論の方を先行させている論もあります。しかしどれも一生懸命ですし、取り組んでいる問題のスケールも大きなものです。それにつけても感ずることは、中国文が読める地理学者が、もっと日本に出ないかということです。そういう自分自身の中国語の能力もあやしいものです。しかし向うへは日本の研究物は行きます。反対に向うからは、研究物がなかなか来ませんが、その上にわれわれが新聞などで報道される方面にだけ関心を持ち、この国の学問に無関心でいたのでは、ますます一方交通になるばかりです。これは日本の地理学の発達にもよくないことと思います。

## 軽井沢雑感

有末武夫

このような題で何か書いてみようという気になったのは、私が“国際的高級別荘地”の住人になったからでもなく、なるうと欲しているからでもない。観光学会の見学旅行でバスにゆられながら見たり聞いたり感じたりしたことを書いてみることにしたい。

第1に現在の軽井沢は国際的でもなく、高級でもなく、別荘地でもないということである。旧軽井沢が開かれたのは明治後期日本在住のイギリス人が相談して、200戸の別荘を建てたことによるもので、大正年間までは外人と交際する必要のある日本人別荘をも交えて、たしかに国際的であった。今はルームクーラの普及と飛行機の発達により、日本国内に外人の避暑のための別荘が不要になったという。戦後の世相の変化は、ショートパンツの奥様に表通りを歩させ、真夏でも白足袋を必ず着用していた国際的高級別荘の奥様をなげかせている。また近年は会社の寮や、各種団体の宿泊施設がやたらとふえて、1~2泊程度の団体旅行者が、別荘地の雰囲気をごわしている。小中学生の団体が土産物店にむらがっているようすは、日光や箱根と同じで“日本の大衆観光地”と看板を塗りかえたらいかなものか。

第2に、上述のようにいわれても、私のような下下の者が旧軽井沢の植込みの奥にちらつく古い建物を見ると、やはり別世界といった感じをうけることは事実である。このようなたたずまいの中に、皇太子殿下と美智子妃殿下のロマンスの花を咲かせたテニスコートを見た。戦前の天皇や皇室のいかめしさを知る者にとって、そこがあまりにも開放的で小さく、しかも粗末で、あまりにも普通すぎるテニスコートであることに、最初はとまどい、次に少しがっかりし、最後にこれでよいのだと自分自身にいいかせながら、カメラを構えてみた。そしてそのような年配の一群をにやにや